

は既に白鳥博士⁽²⁾の契丹女眞西夏文字考に見えて居るから、こゝに繰り返す要は無い。しか此の以外に現存せる契丹文字らしきものについての消息を傳へて居るものが無いではない。露西亞の Pozdneieff 氏は一八九三年の旅行に於て、六月六日に内蒙古巴林の白塔子 (Čagan Soborga) に着き、その地の牆壁内に存する白い大理石破片の塊堆を調査したが、其の中の八角の石柱の破片に、一部分に佛の立・坐像の浮彫、一部分に文字を刻したものを見出した。文字は氏の解し得ざるもので、然も漢字の變體なることは疑無く、世間に知られない契丹文字といふものらしい。拓本を取つたけれども、石の破損磨滅が甚しいので、四片の拓本中寫眞版と爲し得たのはたゞ一片のみである旨を記して居る。然もその寫眞版といふものもその旅行記には載せられてゐないから、如何なるものであるか知るを得ない。白塔子といふ地は遼代の慶州に當ること疑無いと思はれるから、此の地に契丹文字を記した遺物のあるのは極めて自然のことであるが、肝腎の寫眞が示されない以上、何とも考のつけ方もない。暫く氏一箇の推測に過ぎぬといふ外あるまい。同じ地方を精密に踏査した佛の Mullie 氏は、一九一二年に蒙古巴林に於る大遼國の故都といふ長篇を、通報誌上に公けにしたが、氏は白塔子に於ては何等かゝる文字を有する遺物の存することを記さず、たゞ此の地に存する數個の斷碑の中に、「聖祖」といふ漢字の見ゆる一片を得たことを述べてゐる。 Pelliot 氏はこれによつて、Pozdneieff 氏の契丹字といふのは Mullie 氏のいふ漢字のことではなからうかと疑つてゐる。⁽⁵⁾ 更にまた羅振玉氏はその古鏡圖錄下卷に、八角形の鏡一面を載せ、その裏に刻した異體の文字四字を以て、契丹國書と名づけた。圖錄には何等の説明も無いが、此の鏡は朝鮮總督府博物館に藏せらるゝもので、同府發行の博物館陳列品圖鑑第二輯に之を載せてある。但し圖鑑には女眞字鏡と名づけ、高麗時代の製作であらうと説明してある。